

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年2月12日
【四半期会計期間】	第61期第3四半期 (自平成24年10月1日至平成24年12月31日)
【会社名】	キーコーヒー株式会社
【英訳名】	KEY COFFEE INC
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 柴田 裕
【本店の所在の場所】	東京都港区西新橋2丁目34番4号
【電話番号】	03(3433)3311(代表)
【事務連絡者氏名】	財務部長 橋口 芳久
【最寄りの連絡場所】	東京都港区西新橋2丁目34番4号
【電話番号】	03(3433)3311(代表)
【事務連絡者氏名】	財務部 担当部長 大家 悟
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

回次		第60期 第3四半期 連結累計期間	第61期 第3四半期 連結累計期間	第60期
会計期間		自 平成23年4月1日 至 平成23年12月31日	自 平成24年4月1日 至 平成24年12月31日	自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日
売上高	(百万円)	41,316	42,013	53,741
経常利益	(百万円)	695	1,589	256
四半期純利益又は当期純損失()	(百万円)	187	912	70
四半期包括利益又は包括利益	(百万円)	198	1,016	82
純資産額	(百万円)	33,149	33,811	33,033
総資産額	(百万円)	45,271	46,475	44,575
1株当たり四半期純利益金額又は 1株当たり当期純損失金額()	(円)	8.46	41.22	3.17
潜在株式調整後1株当たり 四半期(当期)純利益金額	(円)			
自己資本比率	(%)	70.8	70.4	71.6
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	1,363	1,847	2,649
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	158	246	1,227
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	510	520	610
現金及び現金同等物の 四半期末(期末)残高	(百万円)	7,828	9,023	7,945

回次		第60期 第3四半期 連結会計期間	第61期 第3四半期 連結会計期間
会計期間		自 平成23年10月1日 至 平成23年12月31日	自 平成24年10月1日 至 平成24年12月31日
1株当たり四半期純利益金額	(円)	8.75	29.63

- (注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
3. 第60期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失であり、また潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4. 第60期第3四半期連結累計期間及び第61期第3四半期連結累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 【事業の内容】

当第3四半期連結累計期間において、当社グループにおいて営まれている事業の内容に重要な変更はありません。

また、主要な関係会社についても異動はありません。

第2 【事業の状況】

1 【事業等のリスク】

当第3四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。

なお、重要事象等は存在していません。

2 【経営上の重要な契約等】

当社は、インドネシア共和国においてコーヒー農場の経営とコーヒー集買事業を行うことを目的として、東食株式会社(現株式会社カーギルジャパン)と昭和49年9月に合弁会社スラウェシ興産株式会社を設立しました。当社はトラジャコーヒー農場開発のための技術を供与し、株式会社カーギルジャパンは商社の強みを生かして合弁事業を営んでまいりましたが、当社が平成24年10月に株式会社カーギルジャパン所有の全株式を譲受したことにより、スラウェシ興産株式会社を完全子会社としました。これによりトラジャコーヒー農場開発に関する株式会社カーギルジャパンとの技術供与契約は終了しております。

当社は引き続き、インドネシア共和国においてコーヒー農場の経営とコーヒー集買事業を継続しております。

3 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営成績の分析

当第3四半期連結累計期間(平成24年4月1日から平成24年12月31日までの9ヶ月間)における当社グループを取巻く経営環境は、東日本大震災の影響から緩やかに回復の兆しが見られたものの、欧州金融問題や電力料金の値上げ、低調なまま推移している個人消費など厳しい状況が続きました。

コーヒー業界は、ここ数年高値圏で推移していたコーヒー生豆相場が最高値圏を脱したものの先行きは不透明であり、また、コーヒー以外の製品についても主原料となる穀物類の国際相場が高騰するなど、予断を許さない状況が続いております。

このような市場環境の下、当社グループはコーヒーの持つ魅力を生活者にお届けし続けるという企業使命を果たすため、「品質第一主義」の経営理念に基づき、「収益性の改善」と「市場競争力の強化」を2つの柱として新たな事業領域の開拓、生活者のニーズにお応えする新商品の開発、お客様との絆を深める企画提案型の営業活動を展開し、業績の回復に努めてまいりました。

また、当社は、株式会社銀座ルノアールと経営資源を相互に活用することを目的に、資本・業務提携に向けた協議に入る旨の基本合意書を平成24年11月に締結しました。

これらの結果、当社グループの当第3四半期連結累計期間の売上高は、420億13百万円(前年同期比1.7%増)となりました。利益面は大きな影響を受けた東日本大震災以前の状況まで回復しつつあり、営業利益は13億80百万円(同165.8%増)、経常利益は15億89百万円(同128.5%増)、四半期純利益は9億12百万円(同386.7%増)となりました。

セグメントの営業概況は次のとおりであります。

(コーヒー関連事業)

業務用市場では、「トアルコ トラジャ コーヒー」や「氷温熟成珈琲」など差別性の高いプレミアムコーヒーの拡販活動を推進しました。また、お取引先への支援策として、「パスタフェア」や「ほっと和むシチューフェア」などを実施するとともに、「きのこのクリームシチュー」などの新商品を発売しました。また、カフェビジネスを成功に導くスキルや最新の情報提供を充実させる施策の一つとして、アメリカやカナダで開催されている体験型講座である「バリスタネーション」を日本で初めて5月に開催しました。

家庭用市場では、春夏商品として大正時代の味わいを再現した「横濱1920 CLASSIC」をドリップオンの形態で新発売しました。手軽にカフェ気分が味わえる割りカフェシリーズに「抹茶オレベース」、「バナナオレベース」の新商品を投入、水出しコーヒーシリーズには「氷温熟成珈琲 水出し珈琲」を新たに投入しました。秋冬商品としては、専用圧力缶を開発し、煎りたて、挽きたて直後の香り豊かな「ヴァージンアロマ」と一定時間経過後の「セカンドアロマ」を融合させて、味と香りが際立つ新次元のコーヒー「天使のアロマ」シリーズなどを発売しました。

ギフト商品では、中元期に「氷温熟成珈琲 アイスコーヒー」や「氷温熟成水出し珈琲&ドリップオン」を詰合わせたギフトなど全42アイテムをラインアップしました。歳暮期には、「“煎りたて、挽きたて”の新次元の香りを贈り物に！」をテーマとし、iTQi（国際味覚審査機構）『優秀味覚賞』を3年連続受賞した「トアルコ トラジャ コーヒー」の詰合わせギフトなど全23アイテムをラインアップしました。

また、2012年度モンドセレクションにおいてもアロマフラッシュ「鮮やかな香り キリマンジェロブレンド」が2年連続『最高金賞』を受賞し、2012年iTQiにおいては、「真空パック（VP）スペシャルブレンド」が『優秀味覚賞“三ツ星”』を受賞するなど、数々の当社製品が高く評価されました。

この結果、当第3四半期連結累計期間におけるコーヒー関連事業の売上高は357億72百万円（前年同期比0.1%減）、営業利益は16億13百万円（同94.1%増）となりました。

(飲食関連事業)

株式会社イタリアントマトでは、「サマースイーツフェア」「夏のフードフェア」「夏のコールドリンクフェア」などの販促策を実施しました。また、「国内は充実」「海外は拡大」の方針の下、国内では消費動向を慎重に見据えて堅実な出店を目指して大学キャンパス内などへの出店を行い、海外ではアジア地域での新規出店を進め、中国福建省廈門市に「イタリアン・トマト カフェ アモイ中華城店」、香港では2店目となる「和茶房 鎌倉 夢見屋 香港上環店」などを出店した結果、国内外に13店舗を出店しました。一方、不採算店11店を閉鎖し、店舗数は305店（直営店77店、FC店228店）となりました。

この結果、当第3四半期連結累計期間における株式会社アマンドを含めた飲食関連事業の売上高は46億83百万円（前年同期比19.4%増）、営業利益は24百万円（同158.2%増）となりました。

(その他)

当第3四半期連結累計期間におけるその他事業の売上高は15億57百万円（前年同期比0.8%減）、営業利益は1億3百万円（同20.2%増）となりました。

(2) 財政状態の分析

(資産)

総資産は前連結会計年度末に比べて18億99百万円増加し、464億75百万円となりました。

流動資産は22億95百万円増加し、253億37百万円となりました。これは現金及び預金の増加（10億77百万円増）、受取手形及び売掛金の増加(15億88百万円増)などによるものであります。

固定資産は3億95百万円減少し、211億37百万円となりました。有形固定資産は、建物及び構築物、機械装置及び運搬具等の減価償却が新規取得額を上回ったことなどにより6億30百万円減少しました。無形固定資産は64百万円増加し、投資その他の資産は投資有価証券の増加（3億2百万円増）などにより1億69百万円増加しました。

(負債)

負債は前連結会計年度末に比べて11億21百万円増加し、126億63百万円となりました。

流動負債は前連結会計年度末に比べて10億40百万円増加し、99億54百万円となりました。これは支払手形及び買掛金の増加（4億82百万円増）、未払法人税等の増加（3億10百万円増）などによるものであります。

固定負債は81百万円増加し、27億8百万円となりました。

(純資産)

純資産は前連結会計年度末に比べて7億78百万円増加し、338億11百万円となりました。これは利益剰余金の増加（6億91百万円増）などによるものであります。

(3) キャッシュ・フローの状況

当第3四半期連結累計期間末における現金及び現金同等物は90億23百万円となり、前連結会計年度末に比べ10億77百万円の増加となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、売上債権の増加額15億88百万円、法人税等の支払額4億54百万円などの減少要因があったものの、税金等調整前四半期純利益16億22百万円、減価償却費9億80百万円、仕入債務の増加額4億82百万円などの増加要因がありました。

この結果、18億47百万円の収入となりました（前第3四半期連結累計期間は13億63百万円の収入）。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、有形固定資産の取得による支出などにより、2億46百万円の支出となりました（同累計期間は1億58百万円の支出）。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払などにより、5億20百万円の支出となりました（同累計期間は5億10百万円の支出）。

(4) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社は、平成20年4月23日開催の取締役会において、当社の財務及び事業の方針の決定を支配するものの在り方に関する基本方針（以下「基本方針」といいます。）を定めており、その内容は以下のとおりとなります。

また、当社は、平成23年5月23日開催の取締役会において、この基本方針に照らして不適切なものによって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みとして、平成20年6月24日開催の当社定時株主総会において承認可決されました当社株式の大規模買付行為に関する対応策（買収防衛策）（以下「本プラン」といいます。）を一部修正のうえ、当社第59期定時株主総会で株主様にご承認いただけることを条件として、本プランを継続することを決定致しましたところ、平成23年6月28日開催の定時株主総会において本プランを継続することが承認されました。本プランの詳細につきましては、以下の をご参照ください。

当社の財務及び事業の方針を決定する者の在り方に関する基本方針

当社は、当社及び当社グループの企業価値（以下、単に「当社の企業価値」といいます。）、ひいては株主共同の利益を確保し、向上させていくことを究極の目的としているため、当社株式の大規模買付けや支配権の移転を伴う買収提案（以下「買収提案」といいます。）を行う者（以下「買収提案者」といいます。）のうち、その目的から見て当社の企業価値の向上や株主共同の利益の確保・向上に対し明白な侵害をもたらす者は、当社の財務及び事業の方針を決定する者としては、不適切であると考えております。

また、買収提案が、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に寄与するものであれば、当社は、一概にこれを否定するものではないものの、当該買収提案に関して、株主の皆様に対し必要かつ十分な情報提供が行われない場合には、当該買収提案が当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に資するかどうかについての株主の皆様への適切な判断を妨げる結果となります。そのため、当社は、買収提案者のうち、株主の皆様に対し、必要かつ十分な情報や検討時間等を与えない者についても、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に資するものではなく、買収提案者としては不適切であると考えております。

基本方針の実現に資する特別な取組み

当社の企業価値の源泉は、その創業以来長年にわたり培ってきた「キーコーヒー」そのものの存在感、ブランド力にあると考えておりますが、当社は、この企業価値の源泉であるブランド力を最大限に活かして事業の発展を図るとともに、これに恥じない社会的責任を全うすることで、より一層、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上を目指しており、具体的には、以下の各取組みを実施しております。

(a) コーヒーへのこだわり

当社は、海外からより品質の高いコーヒー豆を適正な価格で安定的に確保できる体制作りに注力するとともに、当社自身も、海外においてコーヒー農場を直営するなど、理想のコーヒー作りを追求するなどし、もって、キーコーヒーのブランド力の向上を図っております。

(b) 生産設備の整備

当社は、平成13年以降、全国4箇所に存在する当社工場のリノベーションに取組み、現在では、全ての工場で、高度の衛生管理機能の整った生産及び物流体制が構築されており、このような生産設備を最大限に活かし、キーコーヒーブランドの存在価値を高めて参ります。

(c) 市場の開拓

当社は、お客様のニーズに応じたコーヒー製品を提供することや、コーヒー市場の裾野拡大に向けた取組みを行う等により、キーコーヒーブランドに対する期待と信頼に応え、キーコーヒーブランドをより確固たる存在にしていきたいと考えております。

(d) 研究開発

当社は営業活動と密接に関連した開発研究所を設置し、コーヒーの基礎研究を行うとともに、新製品の開発、新技術の発明を目指しており、これにより、キーコーヒーブランドのさらなる発展を企図していま

す。

(e) C S R活動

当社は、例えば、生産地の社会福祉に貢献し環境にもやさしいレインフォレストアライアンス認証コーヒーを100%使用した商品を開発するなど、C S R活動を通じて、求められる社会的責任を全うし、キーコーヒーブランドのさらなる発展を目指しております。

(f) コーポレート・ガバナンスの強化

当社は、当社経営に対する監督・監視機能の充実を図り、透明性の高い経営の実現を目指すため、月1回定例開催する取締役会や、必要に応じた臨時取締役会の開催のほかに、原則として週1回、取締役と経営幹部で構成する業務執行会議を開催し、また、4名の監査役のうち3名を社外から招聘するなどしております。

基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定がされることを防止するための取組み

(イ) 当社発行株式の大規模買付行為に対する対応策（買収防衛策）による取組み

(a) 本プランは、当社の特定の株主及び当該株主と一定の関係にある者の株券等保有割合・株券等所有割合の合計が20%以上となる当該株券等の買付けその他の取得等（以下「大規模買付行為」といいます。）を行おうとする者（以下「大規模買付行為者」といいます。）を適用対象としております。

大規模買付行為者は、取締役会又は株主総会において、新株予約権の無償割当ての実施・不実施に係る決議がなされるまでの間、大規模買付行為を実施してはならず、また、買付意向表明書、独立委員会が提出を求める必要情報回答書・追加回答書の提出を通じて、独立委員会に対し情報を提供し、独立委員会は、必要に応じて、株主の皆様に対し、当該情報の全部又は一部を開示します。

(b) 独立性の高い社外監査役等で構成され、独立委員会規則に従い運営される独立委員会は、上記の情報について、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に資するか否かの観点から所定の期間内に評価・検討し、独立委員会としての意見を取りまとめます。その際、独立委員会は、必要に応じて、取締役会に対し意見等の提示を求めます。その上で、独立委員会は、所定の判断基準に従って、取締役会に対し、新株予約権の無償割当ての実施若しくは不実施又は株主総会の決議を得るべき旨を勧告します。これらの意見等の内容は、必要に応じて、株主の皆様にも適時適切に開示されます。

(c) 取締役会は、独立委員会の勧告を最大限尊重し、所定の要件に従って新株予約権の無償割当ての実施・不実施に係る決議を行うか、又は株主総会にその実施・不実施に係る議案を付議します。なお、取締役会が新株予約権の無償割当ての実施を決議するのは、大規模買付行為が、（ ）いわゆるグリーンメーラーであったり、当社の焦土化を意図している場合等で、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に対する明白な侵害をもたらすおそれがある場合、（ ）強圧的二段階買付け等に当たる場合、（ ）その条件が当社の本源的価値に鑑み不十分又は不適当である場合等に該当し、かつ、新株予約権の無償割当てを実施することが相当と認められる場合です。

(d) 取締役会又は株主総会によって、新株予約権の無償割当ての実施が決議された場合、当社は、大規模買付行為者による権利行使は認められないとの行使条件等が付された新株予約権を、当社を除くすべての株主に対して、無償割当ての方法により、その保有する当社普通株式1株につき新株予約権1個を上限として当該決議において別途定める割合で割当てます。ただし、新株予約権の無償割当てが実施された後であっても、当社独立委員会の勧告に従い、当該新株予約権の無償割当ての中止又はその無償取得を行うことがあります。

(e) 本プランは、株主総会又は取締役会において本プランを廃止する旨の決議が行われな限り、平成23年6月28日開催の第59期定時株主総会終了後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに係る定時株主総会終結時までを有効期間とします。

(ロ) 上記（イ）の取組みに対する取締役会の判断及びその理由

(a) 本プランが本基本方針に沿うものであること

本プランにおいては、大規模買付行為者に対し、大規模買付行為に関する必要かつ十分な情報を事前に提供すること及び取締役会又は株主総会において本プランの発動・不発動に係る決議がなされた後に大規模買付行為を開始することを求め、本プランの手続きを遵守しない買収提案、必要かつ十分な情報を提供しない買収提案、さらに、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上の観点から問題のある買収提案に対して、取締役会が、新株予約権の無償割当てを実施することがあるとするものです。

このように、本プランは、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上に資さない大規模買付行為に対し、対抗措置を講じるものですので、取締役会としては、本基本方針の考え方に沿って考えております。

(b) 本プランが当社株主の共同の利益を損なうものでないこと

本プランは、大規模買付行為に際して、株主の皆様に必要な情報と検討時間を確保することを可能にする手続きを定めたものであり、この趣旨に反する大規模買付行為者に対し、対抗措置を講じることを定めています。

また、本プランは、株主の皆様の株主総会におけるご承認を条件に導入・継続されるだけでなく、株主の皆様の意思により有効期間中でも廃止できることとされています。

これらの設計は、いずれも、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上を図ることを念頭に置いたものですので、当社取締役会としては、本プランが当社株主の共同の利益を損なうものでないことは明らかであると考えています。

(c) 本プランが当社役員の地位の維持を目的とするものでないこと

本プランは、大規模買付行為について、必ず取締役会からの独立性が担保された独立委員会の評価・検討を経ることとされ、取締役会は、独立委員会から出される勧告を最大限尊重する必要があるとされているほか、独立委員会から対抗措置を実施すべき旨の勧告がなされた場合であっても、取締役会が、当社の企業価値、ひいては株主共同の利益の確保・向上の観点から適切であると判断する場合には、株主総会を招集し、新株予約権の無償割当ての実施・不実施に係る議案を付議できるとされている点に特徴がありますが、独立委員会が新株予約権の無償割当ての不実施を勧告している場合にまで、取締役会に株主総会に対する、かような議案の付議を認めているものではなく、当社取締役会が、当社独立委員会の勧告を無視し、株主総会を利用して新株予約権の無償割当てを実施するといった恣意的な行為ができないように設計されております。

また、その他にも、新株予約権の無償割当てを実施するにあたっては、所定の合理的かつ詳細な客観的要件が充足される必要があること、有効期間を短期間に限定し、有効期間中であっても、株主の皆様の意思により廃止することが可能になっていることといった特徴があり、本プランの採否及び内容において、取締役会の恣意的な判断が極力排除されるように設計されております。

そのため、取締役会としては、本プランが当社役員の地位の維持を目的とするものではないことは明らかであると考えています。

(5) 研究開発活動

当第3四半期連結累計期間の研究開発費の総額は1億57百万円であり、主要な支出はコーヒー関連事業であります。

(6) 経営成績に重要な影響を与える要因及び経営戦略の現状と見通し

当社グループはコーヒーを生業としている企業であり、その主原料であるコーヒーの生豆は全量海外からの輸入により調達しております。コーヒー生豆は国際相場商品でありますので、相場の高騰や為替の変動により調達コストが上昇し、その上昇分を販売価格に十分に反映出来ない場合、経営成績に重要な影響を与えることとなります。また、景気が低迷し個人消費が減退しますとコーヒーなどの嗜好品に対する支出の減少に繋がります。このような状況を十分に認識し、「収益性の改善」「市場競争力の強化」を2つの柱とした経営を展開しております。

(7) 経営者の問題意識と今後の方針について

コーヒー業界については、コーヒーの飲用機会はまだまだ増加するなど市場の伸張する余地は十分にあると考えておりますが、コスト競争の激化、商品・サービスのライフサイクルの短期化や市場のポータレシ化などで競争がさらに激しさを増すなど市場環境はさらに厳しくなるものと考えております。このような状況に対応するため、当社グループは、ビジネススタイルの転換、新たな商品カテゴリーの創出、新たなビジネス領域の開拓の推進を行い、これらの活動を行う中で企業価値の向上を図り、市場での存在感、影響力を高めることが重要と位置づけております。

第3 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	70,000,000
計	70,000,000

【発行済株式】

種類	第3四半期会計期間末 現在発行数(株) (平成24年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成25年2月12日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	22,464,000	22,464,000	東京証券取引所 市 場第一部	単元株式数は100株でありま す。
計	22,464,000	22,464,000		

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成24年12月31日		22,464,000		4,465		4,885

(6) 【大株主の状況】

当四半期会計期間は第3四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(7) 【議決権の状況】

当第3四半期会計期間末日現在の議決権の状況については、株主名簿の記載内容が確認できず、記載することができませんので、直前の基準日である平成24年9月30日の株主名簿により記載してあります。

【発行済株式】

平成24年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 329,900		
完全議決権株式(その他)	普通株式 22,131,000	221,310	
単元未満株式	普通株式 3,100		1単元(100株) 未満の株式
発行済株式総数	22,464,000		
総株主の議決権		221,310	

(注) 1. 「完全議決権株式(自己株式等)」欄は、全て当社保有の自己株式であります。

2. 「完全議決権株式(その他)」の株式数の欄には、証券保管振替機構名義の株式が100株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数1個が含まれています。

【自己株式等】

平成24年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) キーコーヒー株式会社	東京都港区西新橋 2丁目34番4号	329,900		329,900	1.46
計		329,900		329,900	1.46

2 【役員の状況】

該当事項はありません。

第4 【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成19年内閣府令第64号。以下「四半期連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、四半期連結財務諸表規則第5条の2第3項により、四半期連結キャッシュ・フロー計算書を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第3四半期連結会計期間(平成24年10月1日から平成24年12月31日まで)及び第3四半期連結累計期間(平成24年4月1日から平成24年12月31日まで)に係る四半期連結財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】

(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成24年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	7,558	8,636
受取手形及び売掛金	1 7,024	1 8,613
有価証券	5,387	5,187
商品及び製品	1,207	1,203
仕掛品	190	179
原材料及び貯蔵品	1,060	968
繰延税金資産	218	234
その他	422	349
貸倒引当金	27	34
流動資産合計	23,042	25,337
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	6,462	6,193
機械装置及び運搬具（純額）	1,887	1,687
土地	6,456	6,315
その他（純額）	690	669
有形固定資産合計	15,496	14,866
無形固定資産		
のれん	157	148
その他	305	379
無形固定資産合計	463	528
投資その他の資産		
投資有価証券	3,153	3,455
長期貸付金	219	173
繰延税金資産	175	185
差入保証金	1,763	1,711
その他	601	503
貸倒引当金	340	286
投資その他の資産合計	5,572	5,742
固定資産合計	21,532	21,137
資産合計	44,575	46,475

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成24年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	5,611	6,093
短期借入金	584	448
未払金	1,100	1,312
未払法人税等	276	587
繰延税金負債	0	-
賞与引当金	278	259
その他	1,062	1,252
流動負債合計	8,914	9,954
固定負債		
長期借入金	112	22
繰延税金負債	1	0
再評価に係る繰延税金負債	557	557
退職給付引当金	1,056	1,241
資産除去債務	264	268
その他	634	618
固定負債合計	2,627	2,708
負債合計	11,541	12,663
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,465	4,465
資本剰余金	4,873	4,873
利益剰余金	26,554	27,245
自己株式	541	542
株主資本合計	35,352	36,042
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	195	284
土地再評価差額金	3,624	3,623
為替換算調整勘定	4	5
その他の包括利益累計額合計	3,433	3,344
少数株主持分	1,114	1,113
純資産合計	33,033	33,811
負債純資産合計	44,575	46,475

(2)【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
売上高	41,316	42,013
売上原価	29,783	29,342
売上総利益	11,532	12,670
販売費及び一般管理費		
広告宣伝費及び見本費	831	874
荷造運搬費	840	846
車両費	387	373
貸倒引当金繰入額	31	39
役員報酬	271	272
給料及び賞与	4,428	4,469
賞与引当金繰入額	143	201
退職給付引当金繰入額	425	329
福利厚生費	669	707
賃借料	807	871
減価償却費	279	298
消耗品費	241	267
研究開発費	151	157
その他	1,501	1,579
販売費及び一般管理費合計	11,013	11,290
営業利益	519	1,380
営業外収益		
受取利息	38	28
受取配当金	64	88
為替差益	-	9
受取家賃	30	32
その他	68	67
営業外収益合計	201	226
営業外費用		
支払利息	12	11
持分法による投資損失	2	0
為替差損	5	-
その他	4	5
営業外費用合計	25	17
経常利益	695	1,589
特別利益		
固定資産売却益	0	25
投資有価証券売却益	-	7
負ののれん発生益	26	7
受取賠償金	-	17
特別利益合計	27	57

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
特別損失		
固定資産売却損	-	9
固定資産除却損	21	-
投資有価証券評価損	5	13
会員権売却損	6	1
貸倒引当金繰入額	38	-
事業整理損	19	-
災害損失	42	-
その他	0	-
特別損失合計	135	23
税金等調整前四半期純利益	587	1,622
法人税、住民税及び事業税	375	771
法人税等調整額	16	77
法人税等合計	392	694
少数株主損益調整前四半期純利益	195	928
少数株主利益	7	15
四半期純利益	187	912

【四半期連結包括利益計算書】
 【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
少数株主損益調整前四半期純利益	195	928
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	74	88
土地再評価差額金	77	0
為替換算調整勘定	1	1
持分法適用会社に対する持分相当額	0	0
その他の包括利益合計	3	88
四半期包括利益	198	1,016
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	190	1,001
少数株主に係る四半期包括利益	8	15

(3)【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益	587	1,622
減価償却費	998	980
負ののれん発生益	26	7
固定資産売却損益（は益）	0	16
固定資産除却損	21	-
投資有価証券売却損益（は益）	0	7
投資有価証券評価損益（は益）	5	13
受取賠償金	-	17
会員権売却損益（は益）	6	1
事業整理損失	19	-
災害損失	42	-
貸倒引当金の増減額（は減少）	54	8
賞与引当金の増減額（は減少）	159	19
退職給付引当金の増減額（は減少）	291	187
受取利息及び受取配当金	102	117
支払利息	12	11
持分法による投資損益（は益）	2	0
売上債権の増減額（は増加）	1,826	1,588
たな卸資産の増減額（は増加）	577	107
仕入債務の増減額（は減少）	2,114	482
未払金の増減額（は減少）	2	215
その他	216	303
小計	1,678	2,144
利息及び配当金の受取額	82	106
利息の支払額	12	11
受取賠償金の受取額	-	17
災害損失の支払額	162	-
法人税等の支払額	297	454
法人税等の還付額	74	44
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,363	1,847

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	4,000	5,500
有価証券の償還による収入	4,000	5,500
投資有価証券の取得による支出	221	438
投資有価証券の売却及び償還による収入	410	487
有形固定資産の取得による支出	437	444
有形固定資産の売却による収入	1	177
無形固定資産の取得による支出	-	91
その他	87	62
投資活動によるキャッシュ・フロー	158	246
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	98	401
短期借入金の返済による支出	85	461
長期借入金の返済による支出	135	165
配当金の支払額	330	220
その他	58	75
財務活動によるキャッシュ・フロー	510	520
現金及び現金同等物に係る換算差額	2	2
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	691	1,077
現金及び現金同等物の期首残高	7,136	7,945
現金及び現金同等物の四半期末残高	7,828	9,023

【継続企業の前提に関する事項】

該当事項はありません。

【連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更】

当第3四半期連結累計期間（自平成24年4月1日至平成24年12月31日）

該当事項はありません。

【会計方針の変更等】

当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日至平成24年12月31日)
(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更) 当社及び国内連結子会社は、法人税法の改正に伴い、第1四半期連結会計期間より、平成24年4月1日以後に取得した有形固定資産については、改正後の法人税法に基づく減価償却の方法に変更しております。 これによる当第3四半期連結累計期間の損益への影響は軽微であります。

【四半期連結財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理】

当第3四半期連結累計期間（自平成24年4月1日至平成24年12月31日）

該当事項はありません。

【注記事項】

(四半期連結貸借対照表関係)

1 四半期連結会計期間末日満期手形の会計処理

四半期連結会計期間末日の満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、当第3四半期連結会計期間末日が金融機関の休日であったため、次の満期手形が当第3四半期連結会計期間末日残高に含まれております。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成24年12月31日)
受取手形	4百万円	11百万円

(四半期連結損益計算書関係)

該当事項はありません。

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に記載されている科目の金額との関係

	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
現金及び預金勘定	7,441百万円	8,636百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金		
有価証券勘定に含まれるMMF等	386	387
現金及び現金同等物	7,828	9,023

(株主資本等関係)

前第3四半期連結累計期間(自 平成23年4月1日 至 平成23年12月31日)

1. 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成23年6月28日 定時株主総会	普通株式	221	10.00	平成23年3月31日	平成23年6月29日	利益剰余金
平成23年10月24日 取締役会	普通株式	110	5.00	平成23年9月30日	平成23年11月25日	利益剰余金

2. 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

当第3四半期連結累計期間(自 平成24年4月1日 至 平成24年12月31日)

1. 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年6月22日 定時株主総会	普通株式	110	5.00	平成24年3月31日	平成24年6月25日	利益剰余金
平成24年10月22日 取締役会	普通株式	110	5.00	平成24年9月30日	平成24年11月26日	利益剰余金

2. 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第3四半期連結累計期間(自 平成23年4月1日 至 平成23年12月31日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	四半期連結 損益計算書 計上額 (注3)
	コーヒー 関連事業	飲食 関連事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	35,824	3,921	39,745	1,570	41,316		41,316
セグメント間の内部売上高 又は振替高	342	1	343	1,160	1,504	1,504	
計	36,166	3,922	40,089	2,731	42,820	1,504	41,316
セグメント利益	831	9	840	86	927	407	519

- (注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、飲料製品製造事業、オフィスサービス事業及び通販事業、運送物流事業、保険代理店事業等を営んでおります。
2. セグメント利益の調整額 4億7百万円には、セグメント間取引消去 4百万円、棚卸資産の調整額 17百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用 3億94百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
3. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

該当事項はありません。

(のれんの金額の重要な変動)

該当事項はありません。

(重要な負ののれん発生益)

その他事業において、当社がニック食品株式会社の株式を追加取得したことに伴い、当第3四半期連結累計期間において、26百万円の負ののれん発生益を計上しております。

当第3四半期連結累計期間(自 平成24年4月1日 至 平成24年12月31日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	四半期連結 損益計算書 計上額 (注3)
	コーヒー 関連事業	飲食 関連事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	35,772	4,683	40,455	1,557	42,013		42,013
セグメント間の内部売上高 又は振替高	353	2	356	1,107	1,464	1,464	
計	36,126	4,685	40,812	2,665	43,477	1,464	42,013
セグメント利益	1,613	24	1,637	103	1,741	361	1,380

- (注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、飲料製品製造事業、オフィスサービス事業及び通販事業、運送物流事業、保険代理店事業等を営んでおります。
2. セグメント利益の調整額 3億61百万円には、セグメント間取引消去 5百万円、棚卸資産の調整額 30百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用 3億97百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
3. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

該当事項はありません。

(のれんの金額の重要な変動)

該当事項はありません。

(重要な負ののれん発生益)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(金融商品関係)

四半期連結財務諸表規則第17条の2の規定に基づき、注記を省略しております。

(有価証券関係)

四半期連結財務諸表規則第17条の2の規定に基づき、注記を省略しております。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前第3四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)
1株当たり四半期純利益金額	8円46銭	41円22銭
(算定上の基礎)		
普通株式に係る四半期純利益金額(百万円)	187	912
普通株式の期中平均株式数(株)	22,134,755	22,134,111

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

当第3四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年12月31日)

(株式取得による企業結合)

当社は、平成24年11月19日開催の取締役会において、株式会社銀座ルノアールと資本・業務提携に向けた協議に入る旨を決議し、基本合意書を締結しました。本決議に基づき、平成25年1月28日開催の取締役会において、株式会社銀座ルノアールの筆頭株主である有限会社花見煎餅の全株式を取得することを決議し、取得しました。この結果、株式会社銀座ルノアールは、当社の持分法適用会社となりました。

1. 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称

有限会社花見煎餅

なお、有限会社花見煎餅は平成25年1月29日をもって、有限会社オーギュストに商号を変更しました。

(2) 被取得企業の事業内容、企業結合を行った主な理由

有限会社花見煎餅は不動産管理を行っている会社であり、株式会社銀座ルノアールの筆頭株主であります。一方、当社は、コーヒーの持つ魅力を生活者にお届けし続けるという企業使命を果たすため、「品質第一主義」のもと「こころにゆたかさをもたらすコーヒー文化を築く」ことを企業理念に掲げております。また、株式会社銀座ルノアールには、当社との長年の取引を通じ、高品質なコーヒーに対する深い理解をいただいております。さらに同社は、「喫茶業を展開し、くつろぎと憩いの場をより多くのお客様に提供する」という企業理念のもと、「ホスピタリティーサービスの充実」に努めております。今回の資本・業務提携は、これらの企業理念の実現に向けて両社が持つ得意分野や経営資源の有効活用を行うためのものです。

(株式会社銀座ルノアールの概要)

名称 株式会社銀座ルノアール
 事業内容 喫茶店の経営(喫茶等事業)

(3) 企業結合日

平成25年1月28日

(4) 企業結合の法的形式

株式の取得

(5) 取得した議決権比率

(有限会社花見煎餅)

100%

(株式会社銀座ルノアール)

企業結合直前に所有していた議決権比率

0.83%

企業結合日に追加所有した議決権比率

22.34%

企業結合日後の議決権比率

23.18%

(注) 株式会社銀座ルノアールに対する議決権比率は、有限会社花見煎餅の100%子会社化に伴う間接保有の議決権を含めて記載しております。

2. 被取得企業の取得原価及びその内訳

取得の対価 566百万円

取得原価 566百万円

2 【その他】

平成24年10月22日開催の取締役会において、当期中間配当に関し、次のとおり決議いたしました。

(イ) 中間配当による配当金の総額..... 110,670,440円

(ロ) 1株当たりの金額..... 5円00銭

(ハ) 支払請求の効力発生日及び支払開始日..... 平成24年11月26日

(注) 平成24年9月30日現在の株主名簿に記録された株主に対し、支払いを行っております。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成25年2月6日

キーコーヒー株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士 芝田 雅也
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士 斎藤 毅文

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられているキーコーヒー株式会社の平成24年4月1日から平成25年3月31日までの連結会計年度の第3四半期連結会計期間(平成24年10月1日から平成24年12月31日まで)及び第3四半期連結累計期間(平成24年4月1日から平成24年12月31日まで)に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、キーコーヒー株式会社及び連結子会社の平成24年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第3四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

強調事項

重要な後発事象に記載されているとおり、会社は平成25年1月28日付で株式会社銀座ルノアールの筆頭株主である有限会社花見煎餅の全株式を取得し、この結果、株式会社銀座ルノアールは、会社の持分法適用会社となっている。

当該事項は、当監査法人の結論に影響を及ぼすものではない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。
以上

(注) 1. 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2. 四半期連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。